

【中学生の部】奨励賞

『西由比ヶ浜駅の神様』（村瀬 健／著）

青森市立南中学校 3年 水木 苺

「君は、ひとりの人間を真剣に愛したがゆえに心に風邪を引いた。メンタル疾患は、裏を返せば誠実さの証だ。僕はそれを誇っていいと思うんだよ。」この言葉は、私の大切な遠くにいるある人との関係で迷いや悩みがあったときに、それを解決してくれた言葉だった。

私は、この物語にある「愛」というものはまだ知らない。でも感染症の流行により、当たり前「その人」と会うことができなくて苦しくなり、少し「愛」というものがわかった。お互い忙しくなって連絡などができなくなったらと思うと怖かった。だから私はその人と誠実に向き合い、伝えたい想いをたくさん伝えるようになった。この本は私に大切な人の存在の大きさを教えてくれたのである。

『花や咲く咲く』（あさの あつこ／著）

青森市立東中学校 3年 小林 幸愛

この本は、あさのあつこさんのお母さんから戦争のお話を聞き、それをもとに物語を作ったそうです。美しい青春時代を戦争の暗い影に覆われながらも、精一杯に輝こうとした少女たちの健気さと、それを奪う戦争の無情さ、あさのさんの平和への思いが込められています。今年で終戦から76年が経ちます。戦争はこれからは絶対にしてはならないことです。私もひいおばあちゃんから様々なお話を聞きます。私と同じ15歳で体験したそうです。とても昔のことですが、今日まで覚えているということは、とても言葉では言い表せないほど大変だったのだなと思いました。なので私は、戦争の本などを読み、みんなへ、そして後世へと伝えていきたいです。

『かがみの孤城』（辻村 深月／著）

外ヶ浜町立三厩中学校 3年 吉田 由奈

「自分の居場所は一つきりではない。」

この言葉は、私が学校に行きたくないと悩んでいたときに刺さった言葉だ。受験生である私は、勉強のことで頭がいっぱいになり、これから先のことを不安に思うことがよくある。最近、学校や家は、未来の自分のために勉強をしなくてはならない場所だと感じていた。しかし、この本が私に「ここだけが居場所じゃない。闘うのが嫌なら、闘わなくてもいい」と教えてくれた。「闘わなくてもいい」というのは「逃げてもいい」という意味ではなく、「違う場所でまた挑戦する」と私は捉えた。

今の居場所に苦しさを感じている人、違う視点で物事を考えたい人におすすめの一冊だ。

『真夜中のディズニーで考えた働く幸せ』（鎌田 洋／著）

平川市立平賀西中学校 3年 鈴木 悠希子

この本はディズニーの光の当たらない仕事「ナイトカストーディアル」になった鎌田洋さんが仕事の喜びについて気付く話です。

それまでの私は、仕事は表舞台で光の当たる仕事こそが誇れる仕事だと思っていたけれど、光の当たらない仕事も会うこともない誰かの幸せをつくって誇るべきことなのだと気付きました。また、私は何の職業につきようか悩んでいましたが、この本を読んで自分の好きなことや、やりがいを感じられる仕事を選べばいいことに気づけました。そして仕事でやりがいを感じられることが本当に大切なことだと思いました。

この本は私のように将来の仕事について悩んでいる人に、ぜひ読んでもらいたいです。

『檸檬』（梶井 基次郎／著）

十和田市立切田中学校 1年 岩本 郁香

得体の知れない憂鬱な心情を抱えている主人公「私」が一つの檸檬と出会う。檸檬爆弾として洋書店の本棚に仕かけ、なに喰わぬ顔で逃走するという話だ。この本では、「私」について、また一つの檸檬を爆弾として見立てるといった内容が色鮮やかに描かれている。

私は今、中学一年生で入学したばかりの時友達と別の学校で少し馴れないせいか、この話の主人公「私」のように、気が晴れない鬱屈な気持ちになることがあった。この本を読んだとき、檸檬の黄色の鮮かさやきれいな紡錘形などのイメージと重なり、爽やかな気持ちになった。他にも作中に出てくる言葉に共感することができる。私は、悩みが爆発する檸檬のように消え去った。ぜひ読んでみてほしい。

『デカ物語 日本一長生きしたカバが見つめた半世紀』(あんず ゆき/著)

三沢市立第一中学校 1年 江口 花鈴

希望を持って入学したはずの私は、自信を失い、気づけば周囲の顔色を伺うことが多くなっていた。私はそんな自分が嫌いだった。

この本の主人公は、時代に翻弄されながらも、飼育員をはじめとした理解ある方々の尽力もあり、58歳という日本最高齢を記録した雌カバのデカ(カバ子)である。言葉では決して通じ合えない人とカバとがお互いを思い、考え、徐々に信頼関係を築く姿に、私は涙が止まらなかった。他人と自分を比較し、思い通りにならない原因の全てを環境のせいにしてきた自分が恥ずかしくなったのである。

私は私である。大事に育て、導いてくださる両親や先生方に恥じぬ生き方をしよう。そう強く思わせる一冊である。

『西の魔女が死んだ』(梨木 香歩/著)

八戸市立江陽中学校 2年 工藤 結葉

「シロクマがハワイより北極で生きる方を選んだからって、誰がシロクマを責めますか。」いじめを受けていた主人公に祖母が放った言葉。日本では、逃げることを良しとしない風潮が強い気がする。そんな社会を生きる人にこの本は、逃げることと楽な生き方をするには似ているようで全く違うと教えてくれる。私は、友人の涙を何度も見てきた。その度に何もできない私があった。きっと、心のどこかで悩んで苦しむことは悪いことだと思っていたからだろう。逃げること=環境を変えること。大切なのは自分の意志で決めること。自分が自分らしくいられる形で、自由に生きること。私も、後悔のない人生にするためにたくさん悩みながら一生懸命に生きよう。

『52ヘルツのクジラたち』(町田 そのこ/著)

八戸聖ウルスラ学院中学校 3年 柳谷 菜々子

クジラは普通10から39ヘルツで歌う。だから、52ヘルツで歌うクジラの声は広い海に確かに響いているのに仲間には届かない。

私は勉強が上手くいかず、誰にも相談できず悩んでいた時期があった。そんな私の52ヘルツの声を聞いてくれている家族や友達存在に気づかせてくれたのがこの本だ。この本の主人公は家族から虐待を受けて育った。そんな主人公が出会ったのは母親から虐待され「ムシ」と呼ばれる少年だった。彼らは52ヘルツの声をあげていた。しかし、その声を聞こうとしてくれる人は必ずいる。この本はそんな当たり前のことに気づかせてくれた。辛い時や苦しい時、一歩踏み出す勇気をくれるお薦めの一冊だ。

『461個の弁当は、親父と息子の男の約束。』(渡辺 俊美/著)

階上町立道仏中学校 2年 濱谷 歩香

「パパの弁当がいい」高校入学を控えた息子がシングルファーザーの父へ放った言葉。この本は高校3年間、461個のお弁当を父が息子への愛情と感謝を込めて作る物語だ。

この本を読むたび、私は部活の試合のときに母が作ってくれる弁当を思い出す。いつも食べていた弁当は体だけでなく、心のエネルギーにもなっていたのかもしれない。この本は、今まであたり前だと思って食べていた弁当は、私に大きな勇気を与えてくれていたことに気づかせてくれた。この本を是非、人間関係に悩む人、自分自身との向き合い方に困っている人に読んでもらいたい。孤立感にさいなまれがちなコロナ禍だからこそ、身近な大切な人とのつながりを改めて感じて欲しい。